29　次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。 〈名古屋大〉　二〇一四年度出題

上　　、　　強　、　㆓ 猛　㆒　㆑ 。　　　㆓ 監　察　御　㆒ ㆑ 。高　宗　　、㆓ 朝　散　大　㆒、㆓ 辺　㆒。前　後　四　十　余　年、恭　　㆑ 、　 不㆑ 。　　　　　、師　徳　ａ密　㆑ 。㆑ ㆓ 同　㆒、

ｂ頗　㆓ 師　㆒、 ㆓ 　外　㆒。師　徳　㆑ 　而　不㆑ 。　　１㆑ 、㆓ 仁　㆒ 、師　　　。 、㆑ 　　、　　臣　㆑ 。又　、師　　㆑ 　。　、臣

ｃ嘗　同　、ずト㆑ ㆓ 　㆒㆑ 。則　天　、朕　之　㆑ 、師　徳　　　也、亦　㆑ ㆑ ㆑ 　矣。仁　傑 ２　　而　、　、婁　　盛　徳、我　㆓ 　㆒㆑ 、㆑ ㆓ 　㆒ 也。㆓ 危　乱　之　㆒、屠　 者　㆑ 、而　師　徳　㆓ 功　㆒ 終　、識　者　㆑。、師　徳　㆓ 　㆒、　弟　某　㆓ 資　㆒ ㆓代　州　都　㆒。すルニ㆑ 、㆑ 　、吾　 不　、位　㆓宰　㆒。　今　又　得㆓ 州　㆒、 ㆓ 過　㆒、　所㆑ 　也。　　　㆑ 。弟　　、３自㆑ 今　雖㆑ 有㆘ ㆓ 某　面㆒ 者㆖、亦　不㆓敢　言㆒、但　　㆑、㆑㆑ ㆓ 兄　之　㆒ 也。師　徳　、此　　㆓４　㆒ 也。　前　人　　者、㆓ 於　㆒ 也。汝　今　㆑、　㆓前　　㆒也。唾　㆑ 　㆓ 　㆒、５㆐㆓如　 而　㆒㆑。弟　、　㆑ 。師　徳　与㆑人　㆑ 、皆　　類　也。

（『大唐新語』による）

【語注】

○上元　唐代の年号。

○吐蕃　チベットの王国。

○婁師徳、狄仁傑　いずれも人名。

○監察御史、朝散大夫、都督　いずれも官名。

○高宗　唐代の天子。　　○辺任　辺境の任務。

○孜孜　つとめ励むさま。　　○相　宰相。　　○擠　おしのける。

○外使　外国への使者。　　○則天　則天武后。　　○際　際限。

○屠滅　ほろびる。　　○廟堂　朝廷。　　○州牧　州の長官。

問１　波線部ａ「密」ｂ「頗」ｃ「嘗」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問２　傍線部１「覚㆑之」は、何を覚ったのか説明せよ。

問３　傍線部２「大慚而退」とあるが、それはなぜか説明せよ。

問４　傍線部３「自㆑今雖㆑有㆘唾㆓某面㆒者㆖、亦不㆓敢言㆒」を書き下し文にせよ。

◎問５　傍線部４「我憂」とは何か、説明せよ。

問６　傍線部５「何㆐㆓如笑而受㆒㆑ 之」を現代語訳せよ。

◎問７　婁師徳はどのような人物か、本文の内容を要約しながら百五十字以内で述べよ。

【解答と採点基準】

問１　ａ＝ひそかに　　ｂ＝すこぶる　　ｃ＝かつて

問２　Ａ狄仁傑が宰相になったのは婁師徳の推薦のおかげであるのに、Ｂ仁傑はそれを知らず師徳を軽んじ朝廷から排除しようとするが、Ｃ師徳はそれを知りながらも仁傑を恨む様子がないこと。

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝４

問３　Ａ仁傑は師徳が賢人であるとも、人の才能を見抜くことができるとも評価しない旨を則天武后に述べたが、Ｂ武后からその師徳が仁傑を宰相に推薦したことを知らされて、Ｃ師徳の人物の大きさに気づかなかった自分の愚かさを痛感したから。

Ａ＝３／Ｂ＝３

Ｃ＝４〔「愚かさ」がなければ０。〕

問４　今より某の面に唾する者有りと雖も、亦敢へて言はず

問５　Ａ兄弟そろって出世して過分な地位に就くと人に嫉妬されやすいが、Ｂ弟がその対処法を誤って、身を危うくするのではないかという心配。

Ａ＝５／Ｂ＝５〔「身を全うすることができなくなる」なども可。〕

問６　（顔に吐きかけられた唾をぬぐうより）笑って唾を吐きかけられたままにする方がよい。

「人の唾を甘んじて受ける方がましだ」なども可。

問７　Ａ外敵の討伐に名のりをあげ、長期におよぶ辺境の任務を果たす一方、部下にも誠実に接し、勤勉実直であった。Ｂ密かに推薦した狄仁傑に軽んじられても恨まない度量があったので、混乱期にも功名を保つことができた。Ｃ弟が州の長官になった時は、ねたみを買って地位を失わないよう教え諭すなど、Ｄ人と争わない温厚な人物であった。（150字）

Ａ＝２／Ｂ＝３／Ｃ＝３／Ｄ＝２

【書き下し文】

　のめ、にして、してをりててをつ。を以てにず。いにび、をけ、らをべしむ。、にしてにし、としてらず。りてたるや、師徳問１ａかに之をむ。とるにび、問１ｂる師徳をんじ、に之をにす。師徳之をるもみず。之をり、仁傑にひてはく、師徳はなるかと。へて曰はく、と為りてはみる、賢はち知らずと。問ふ、師徳はをるかと。対へて曰はく、臣問１ｃてなるも、だの人を知るをかずと。則天曰はく、のをふるは、師徳にむるなり、人を知るとふべしと。仁傑いにぢてき、じて曰はく、の、其のるると為るも、其のをふしと。のにたり、するをするも、師徳を以てし、之をとす。め、師徳にるや、其のきを以てをす。にかんとするに、之にひて曰はく、くしてにして、にる。又を、ににるは、のむなり。をてをへんと。弟対へて曰はく、問４今よりのにするりとも、へてはず、ら之をはば、のひとらざるにしと。師徳曰はく、にが憂ひと為るなり。れ唾する者、りにするなり。汝今之を拭はば、れのりにらふなり。唾拭はずしてにらかんとす、ひてをくるにれぞと。弟曰はく、んでへを受くと。師徳人とはざること、のなり。

【現代語訳】

　上元のはじめ、吐蕃が強盛であったので、（高宗は）勅命で強く勇ましい武人を

募り吐蕃を討った。婁師徳は監察御史であったが、これに応募した。高宗は大変

喜び、（彼を）朝散大夫に任じ、もっぱら辺境を統治させた。以後四十年余り、誠

実に部下に接し、勤勉実直であった。狄仁傑が宰相になったが、これは師徳がこ

っそり推薦したのだった。（仁傑はそれも知らず師徳と）同じ地位に就くと、非常

に師徳をあなどって、しきりに外国への使者にして朝廷からおしのけようとした。

師徳はこれを知っても恨みに思わなかった。則天武后はこれに気がつき、仁傑に

尋ねて言った、師徳は賢明であるかと。（仁傑は、）将軍となってからはまじめに

任務をはたしていましたが、賢明かどうかは存じませんと答えた。（武后は）また

尋ねた、師徳は人を見抜く力があるかと。（仁傑は、）私は以前彼と同じ役職にあ

りましたが、まだ彼が人を見抜く力があると聞いたことがありませんと答えた。

武后は言った、私がそなたを宰相にしたのは、実に師徳が推薦したからなのです、

彼は人を見抜く力があると言うべきですと。仁傑は大いに恥じて退出し、嘆息し

て言った、私は婁公の立派な徳に包まれたが、その徳の大きさは際限がないと。

存立が危うく乱れた朝廷にあって、ほろびる者はあとを絶たないが、師徳は手柄

を名声によって最後まで勤めあげ、見識のある人は彼を大いに誉めた。以前、師

徳は朝廷にいて、彼の弟のなにがしが資質が優れていたので代州の長官を拝命し

た。赴任しようとするときに、（師徳は）弟に言った、私は才能がないにもかかわ

らず若くして、宰相になった。お前もまた州の長官になって、みだりに身に過ぎ

た位にすがるのは、人がねたむところである。どういう心構えで仕事を全うしよ

うと思うのかと。弟は答えて言った、今後、私の顔に唾を吐きかける者がいたと

しても、決して文句を言わず、ただ自分で唾をぬぐったとしたら、兄さんが心配

したようにはならないと考えますと。（それに対して）師徳は言った、そのことが

まさに私の心配なのだ。そもそもさっきの唾を吐きかけた者は、怒ってやったの

だ。お前が今、これをぬぐったとしたら、これはその人の怒りに逆らうことにな

るのだ。唾はぬぐわずともそのうち自然に乾く、（だから問６顔に吐きかけられた唾

をぬぐうより）笑って唾を吐きかけられたままにする方がよいと。（そこで）弟は

言った、謹んで（兄さんの）教えを承りますと。師徳が争わないことは、皆この

ようであった。